

紅白饅頭とクリームブリュレ

奈良県 中尾 なつみ

私が卒業式の紅白饅頭を受け取ったのは、賞味期限が過ぎてからであった。もう切れてるけどええか、と職員室の向かいの部屋で困った笑顔の先生に訊かれたのを覚えてる。饅頭は遠慮して、私はそこで卒業証書を受け取った。

卒業式を欠席した日、母は私を外食に誘った。行き先は近所にある、私が行ったことのないパスタ屋さんだった。母曰く、そこは無愛想だが腕の立つマスターが一人で切り盛りしているという。喋りながら食べている客を好まず、温かいまま料理を食べてほしいというこだわりがあるそうだ。私はなんだか緊張してしまっただが、美味しいから、と母に背中を押され、二人で向かった。お母さんは卒業式に行けなかったことをどう思うのだろうか、考えながら。

小学校頃に毎日通った商店街の中に、思いがけずその店は、あった。店先の小さなキャンバスには本日のメニューが書かれている。隠れ家のようにひっそりとした店内のカウンター席に座り、母が注文する。お客さんは私達だけで、静かな空気の中で料理を待った。

初めて出てきたのは、色とりどりの海藻ビーズが乗ったサラダと、バスケットに入ったガーリックトースト。この粒々はなんだろうね、と母と顔を見合わせながら、パンを口に運んでいると、すぐにパスタが出された。クリームソースがたっぷりとかかった出来立てのパスタはとても美味しく、冷めないうちに食べようと夢中で食べた。「紅白饅頭、食べたかったなあ」などと悔やむ食い意地は、胃袋と共に満ちていった。

「ごちそうさま、と言って皿が下げられるのを眺めていると、マスターが声をかけてきた。」

「新しいデザートを夜に出そうと思っていて。よかつたら、食べてもらえませんか。」

私は大変びっくりしながら頷いた。一体、何が出てくるのだろうか？入店したとき緊張でどきどきしていた胸は、期待の鼓動でいっぱいだった。

「クリームブリュレです。」

目の前に差し出されたのは、キウイとイチゴが添えられ、ホイップクリームの上には銀色のアラザンが乗せられた、クリームブリュレだった。とても可愛らしく盛り付けられたスイーツに目を見張り、恐る恐るスプーンを入れる。すると、かつんと音が鳴った。湖に張った氷のように、あぶられたカラメルが表面を覆っているのだ！クリームブリュレを食べたのは初めてで、なんて幸運だろうと喜びながら、味わった。

ありがとうございます、と言っただけで、会計を済ませる。

「こちらこそ、また来てください。」
マスターは笑っていた。

「あんなにこやかなのは初めて見たわ。きつとなっちゃん料理をすぐに食べて、『ありがとうございませす』『ごちそうさまでした』言うて行儀よくしてたからやろうね。」

帰り道に母は驚きつつも褒めてくれた。

その日の夜、布団に入ると今日のクリームブリュレがまぶたの裏に像を結んだ。初めて見た砂糖の焦げ目を思い出すと笑みがこぼれた。なんて素敵なサブライズだろう、いいこともあるものだなあ。思い出すと、涙がするりと目の横を流れていった。

私が卒業式に出なかったのは、高校生活が辛かったからだ。二年生になり高校を休みがちになるにつれ、私はずっと間違った道にいるのだと感じていた。私が母に悩みを話すと、母がこう呟いたこともある。

「なっちゃんが卒業式に出るところを見たら、私は泣くと思う。今まで辛かったなあ。」

そう言った母が、卒業式を欠席する旨を電話しているとき、私は自分のことが情けなくて大嫌いだ。高校のこと、全てが憎い訳ではなかった、悔しかった。

クリームブリュレは、受け取ることでできなかった卒業証書のようにだった。「何かしてもらったら『ありがとう』ってちゃんと言うんやで」と教えてくれた中学の頃の友達。「いただきます」と欠かさず言う姿を褒めてくれた先生。彼らとの出会いの上に立って私が生きてきたことを、見てくれていた誰かがいる。その気づきは、今もお、私の心に残っている。

私が進学した大学では、食堂のクリームブリュレが大人気だ。運良く手に入った日には、カチコチになったカラメルを割るたびに、あのパスタ屋さんを思い出す。

一般の部 優秀賞・げんでんふれあい福井財団賞

三十四年目の片道切符

東京都 伊藤 直子

進学のために故郷を離れて三十三年が経った。盆、暮れ、正月、GWとマメに帰省してきたので、福井と東京間をほぼ百回、往復したことになる。

いつの頃からだっただろうか。帰京の日、実家の玄関で靴を履きながら、「これが両親との今生の別れになるかもしれない」との思いが、ふと頭をよぎるようになったのは。

忘れられない記憶がある。私が高校生の時、二歳上の兄が東京の予備校に通うために家を出ることになった。その出立の朝、兄を乗せたタクシーが走り出すや、見送っていた祖父が後を追うように、着物姿で駆け出したのだ。厳格で近寄り難かった祖父の突然の行動に、家族の誰もが目を見張った。あつという間に足がもつれ、転びそうになった祖父を父が支え、制したことでは収まったが、祖父は結局、兄の志望校合格の報を聞くことなく亡くなった。あの時、祖父は初孫との今生の別れを予感したのでろうか。走り去るタクシーを見送る祖父の必死の形相と、めくれ上がった着物の裾からのぞいた痩せた脛は、今も私の脳裏に切なく焼き付いている。

おかげで、しっかりと別れることが苦手になった。「体に気をつけて」「元気で」「こんな当たり前の別れの言葉が、口にしたら最後、今生の別れになってしまひそうでこわくて言えない。私五十代、両親ともに八十代となった今では不吉なワードにすら思える。なのでいつしか、帰京の朝は極力さりげなく、が我が家の通例となった。

近所のポストに手紙を投函しに行くような何気なさで、「じゃ、行ってくる」と私が言っただけで家を出る。私と性格が似ている父は、茶の間から「おう」と返事をするだけだ。「銀行に用事がある」と言っただけで、私より先に出かけてしまうことさえある。ただひとり、

母だけは素直に、娘との別れを寂しがらる。サンダルを引っかけて、「ちゃんとご飯、食べなあかんよ」などと言いつつ、迎えのタクシーのドアが閉まるまで付いて来る。タクシーが走り出しても、そのまま見送っているらしい母の姿を目の端で感じながら、それでも私は決して振り返らない。こんな厄介な別れを、ここ数年、繰り返し返して来た。

それでも、どんなに注意深く自らが作り出したジレンクスを守っても、「その日」は無情に、確実に近付いているようだ。

今年の夏、母が病の宣告を受けた。要介護認定には至らず、今のところは自宅で生活もできる。そう父から電話で聞いていたが、年が明けて再会した母は、私が知っている母ではなかった。私が帰省する時、母が必ず作っておいてくれた黒豆の煮物もなかった。あつたのは、これまで当たり前に出来ていたことが出来なくなつた母の代わりに台所に立ち、食事の用意をする父の姿だった。

この前、帰省した時は元気だったのに。久し振りに肩を並べて電車に乗って、菩提寺にお墓参りに行った。その時のからりと晴れた山道の匂いまで覚えていた。思えばそれが、元気だった母との今生の別れだったのだとすれば、いかにも私はずかしくなつた。別れは死別に限らない。生きているうちにもこっそりと、潜んでいるものらしい。

老々介護で疲弊していく父を放っておけず、今年に入って既に五回、帰省した。家庭を持たず、気ままな独身生活を送っていた私が、早起きして三人分のみそ汁を作り、両手いっぱい食材を買い出しに行つて、レシピと首つびきで肉じゃがを作る。古くなった家電を買い換えて家事の合理化を図り、水回りを丁寧に掃除する。慣れないうちは寝込むほど大変だったが、作った料理を「おいしい」と言ってくれる両親の言葉に励まされた。何より、「年に数回帰ってくるお客さん」だった私が、再び「家族」として実家に根付いていく。そんな手応えがあった。

私が帰京する朝の風景にも変化があった。父が玄關まで私を見送り、「今度、いつ帰ってくる？」と聞いてくるようになった。東京の大学への進学も、就職も、転職も、何一つ反対せず、結婚しろとも、孫の顔を見せろとも、Uターンしろとも一言も言ったことのない父の、娘に対する初めての、かつ控え目な「側にいて欲しい」というリクエストだと感じた私は、東京での暮らしに終止符を打ち、故郷で再び両親と暮らす決意をした。

今生の別れがこわかった。でもそれは、老いていく両親と向き合う覚悟がなかっただけなのかもしれない。と、今は思う。今生の別れの前には、生と死がせめぎ合う壮絶な闘いがあるかもしれない。親を見送るといふことは、きれいごとではない苦しさもあるに違いない。

い。それでも私は、その苦しさに身を置くことを選んだ。三十三年間、好き勝手に生きた不肖の娘の、最初で最後の親孝行だ。

次の春に、私は故郷に片道切符で帰省する。今生の別れの不安におびえる事は、もうなくなるだろう。

一般の部 優秀賞・福井新聞社賞

朝の一本締め

大阪府 徳重 三恵

夫の朝はすこし時間がかかる。服の脱ぎ着が一人では出来ないからで、いつも私が介助している。パジャマから家着になるのに十分ほどかけてやっと完了だ。

最後に「イエーイ出来た！」と、一本締めを二人で行なつて、わが家の一日が始まる。

一病息災というが、八十二歳になる夫の場合は三病息災である。一病目は十五年前、狭心症のカテーテル手術の折に腹部大動脈瘤が見つかった。これは手術のおかげで命拾いをしたが、血液をサラサラにする薬が必要になった。

二病目の前立腺肥大は、いまのところ薬で経過をみている。そして三病目はパーキンソンという難病である。

十年ほど前になるが、靴をズルズル引きずって歩くのが気になり、診察の結果パーキンソン病だと分かった。その頃から一気に歩行が悪くなり、玄関先やトイレに行く動線に手すりを付けた。けれど、家の中でも肩を貸さないと一人では歩けない状態となった。

役所や保健センターのすすめもあり、さっそく介護施設の利用を申し込んだ。

夫は自分から気安く声をかけ、話を弾ませるタイプではない。デイサービス（以降・デイ）に行っても、一人ポツンと居ることになるのではないかと気をもんだ。そこでケアマネージャーに施設での過ごしかたを聞いてみた。

「体操や将棋、囲碁などをして皆さん楽しく過ごしておられるから、心配は入りませんよ」

と、あっさり私の懸念を払ってくれる。曜日によっては書道も出来るらしい。

「じゃあ、書道のある日に行きます」

なかなか積極的な夫の声に安心する。夫が生涯学習として書道を始めたのは、定年退職をしてからである。当初は車やバスに乗って通っていたが、病気がちになってからは運転免許を更新せず車も手放した。それからは、通信講座に切り替え家で書き

つづけている。半紙に向かっていると気が楽しいという。それがデイの日に、先生から直に指導が受けられるのは有り難いと、やる気まんまんのスタートとなる。

デイに申し込む前まではトイレも私が付いて行くかたちで、目が離せない状態だった。それが週に二回、介護施設で機能回復の運動をしたのと、訪問介護による歩行訓練を毎週受けているお陰で、少しずつ力がついてきた。杖があれば一人でトイレには行けるようになった。

けれど、この病気の特徴とされる、すくみ足は治らず、ときには電池の切れかけたロボットのように、動きがおぼつかなくなったりする。

最近はいよいよ薬が研究され、昔よりはずっと症状を抑えることが出来るようになっていっているらしい。しかし、夫の場合はいくつもの薬を服用しているので、何らかの副作用が出るのではないかと案じていた。

受診の折に、私は医師に自分の思いを言ってみた。――夫は気づかないままに、ゆっくりと歩けなくなってしまう。だから、いま急いで薬の量は増やしたくない。数年かけて、自力で歩けるようになればいいです――と。

医師はその考えに賛同してくれた。薬でようすを見ながら診て行きますしようと。いわば、夫への介助宣言をしたのである。

泣き言は封印しなければならぬ。
この病気は死には至らないが、転んで寝たきりになる可能性があり、それが恐い。

朝の七時前に起きて食事の支度をしていると、ベッドから声が聞こえる。

「そろそろ僕も起きるわ」
自力でベッドに座るには私の介助がいる。

パジャマの上着の袖がなかなか抜けない。
家着のシャツを膝の上に順々に置いていく。靴下が履けない。一つずつ手を貸しながらゆっくり着て行く。冬は早くしないと風邪を引くので気が気ではない。

「今日の予定は何ですか？」

「朝から書道の練習をするわ」

「昨夜のおかずは何だったかしら？」

夫に問いかけながら、私自身はまだ思い出せない。煮魚？ お肉？ えっと何だった？

「ゆうべは鯛の刺身やったでえ」

夫の答えは早い。

「おお、何たる記憶力と感心する。」

「ボケたらあかんで。頼んまつせえ！」

「そう言いながら軽く私の頭をたたく。」

「そうこうしながら服は着終わった。両手をひろげて待っている。トイレに行く前の「イエーイ出来た！」と、朝の挨拶だ。」

今朝も二人で一本締めが出来たことは、ささやかだけれど、いまの私にはかけがえのない幸せを感じる一瞬である。

一般の部 優秀賞・福井仁愛学園賞

仕入れ自転車

佐賀県 大山 秋象

小さいころ、家は食料品店を経営していて、毎日の仕入れは欠かせなかった。住んでいるU町は田舎町であつたので、仕入れは列車で四つ目の一駅まで父が出かけた。

朝五時ごろ、一番の下り列車の音が遠くに聞こえると、父は起きて、上りの一番列車で、U駅から一駅まで毎日通った。家からU駅までは自転車で二キロメートルくらいあつた。持ち手のついた竹のカゴを二つ積んでいった。私が起きたときは、いたためしがなかった。

その父が、夕食のときか、「アキカタ、一回ついて来んか」と言った。自信があるみたいなお調子だ。

「は大きな町で、一駅の周辺には大きな商店や市場があつた。一駅に着くと、まず、川に沿ってテントが並んでいる朝市に行った。ここで、花、野菜、果物、かまぼこ、塩干物、漬物などを買う。露店が何軒もあり、同じものも売っているの、どこで買うのか迷う。父は、そこは経験で、顔見知りのおばさん達から、ちよつと言葉をかわしながら買って行く。ビンールなどまだあまりなく、新聞紙で包んでくれた。それをカゴに入れる。カゴに入れるとき、下に入れるものと、上に入れるものを入れかえて、要領よく入れている。今日は大きなスイカも買う。たちまちカゴはいっぱいになる。父はカゴを、一つはヒモで肩にかけて、スイカは手にさげて運んだ。次に街中に出て、乾物屋へ行く。大きい店だ。三ヶ所行く。高野豆腐や缶詰、メリケン粉など、容器に入っているので汚れる心配はない。ここで買ったものは、ここで受け取らず、一駅まで配達してもらおう。帰りの列車の時間までに間に合うように。このときの父は、きびきびして、家にいるときとだいぶんちがう。こんなに手早く物を見分けて、どんどん仕入れる父は、いかにも仕入れ人の動きになつていた。そんなにたくさん買って大丈夫？お金はい？重いよ、ずい分。U駅に着いてから家まで運ぶのも大変だよ。

仕入れ用のカゴは、四角い、大きなもので、自転車の荷台に2つのせるため、四角でないとダメなのだ。

仕入れたものを入れたカゴは重い、ビクともしない。それを父は、朝市から乾物屋経由で一駅まで、歩いて運んだ。腕と肩、そして足腰におそろしく力のいる仕事で、ヒモは肩にくい込んでいたようだった。私は軽い花を一つ持った。もう帰る列車の時間が近づいている。一駅に着いて、改札口のところで一息いれる。卸店にたのんだ荷物はまだ来ない。父は慣れているのかタバコをくわえ、おちついていっている。スピーカーから列車のアナウンスがあつてから、やつと荷物がくる。来だしたら、魔法のように荷物が集まる。列車が到着すると、父はカゴ二つをすばやく列車にのせる。卸店からたつた今来たダンボール箱やフロシキで包んだスイカものせる。ぐずぐずしてはいられないのだ。私も花を持ってのる。

U駅に帰りついたら、自転車に積む。花やダンボールの軽いのは、カゴの上のせ、重くかたいのはカゴの間に立てかける。フロシキはハンドルにかける。自転車はズシリと沈んだように見えた。下りや平坦な道は自転車に乗っていくが、今日は私があるので押している。「ペダルに乗ってよかばい」と言われて、一瞬、どうするのかと思つたが、私は自転車の右側にいて右足をペダルにのせ、手はサドルにつかまって片足立ちをする。父が左側にいて、ハンドルをにぎっているから倒れない。そのまま押していく。少し左に傾けて、バランスがとれてスイスイ行く。漕がなくて自転

車にのった気分になる。私はU町を見はるかす。うしろも、横にも（私）、前にも重いものをのせているから、少しバランスがくずれるとおしまいだ。タイヤは大丈夫かと心配になる。自転車は、かかえて運ぶよりはマシだが、それでも押す力は相当なものだし、左右のバランスに気をつかう。

「アキちゃん、よかね」と声をかけられる。私の重さが車体を右側にひっぱっているから、なるべく中央寄りに立とうとした。父は普通の顔をして押していく。どこから力がわいてくるのだろうか。さすがに、家の手前三百メートルくらいから始まる登り坂では、私の方から降りると言って、うしろからかよわい力で押した。仕入れの仕方から始まって、この人は家には父ではないのだろうと思えてしかたがなかった。やっと帰りついて、毎日こんな苦業のようなことをしているんだろうかと思った。

仕入れた荷物を出す段になって、
「また、この春雨ば買うて来とらす。仕入帳にちゃんと〇〇（製品名）て、書いておいたろうが……」
と、母の勢いのある声がする。

父は朝ごはんを食べながら、ボソボソ、時には強く言い訳をする。
ここから先は、私の知っている父である。

一般の部 優秀賞・U30賞

確かに、其処に、住んでいた

京都府 作田 優希

「今度、子宮を取ることにしたで。」
夕食の献立を伝えるように、母からさらりとこのメッセージを受け取ったのは、夏の終わり、まだ暑さの残る時期だった。

数年前の健康診断の時から、母の子宮内部に存在している筋腫が徐々に大きくなっていくという指摘を受けていた。最近では生理不順、大量の月経による貧血、長期的な腹痛などの自覚症状があったらしく、今年度の健康診断の検査結果による筋腫の進行具合を見て、手術を決断したらしい。

「癌じゃないし命に関わるもんでもないんだけどね。とって楽になるなら、もうええかなって。」
私は何て返信を打っただろう。きつと当たり障りのない無難な言葉を送っただろうな。記憶にも残らない程度の言葉を。

女性の四人に一人はかかっていると云われる子宮筋腫。母の母（つまりは祖母）も五十代になる前に摘出手術を受けたらしい。

「あんたもなる確率が高いかもよ。」

ふくよかな腹回りをぼんぼん撫でながら忠告してくる母を思い浮かべた。その姿は、胎内に生命を宿している女性の佇まいと寸分違わなかった。

三人兄弟の長子である私は、弟と妹を妊娠していた時期の母のお腹の変化を間近で見っていた。真冬に冷え込んだ手で触れた時、弟が「冷たい！」と言わんばかりに、ぼくと子宮の壁を蹴りその振動が伝わったこと――。もうすぐ産まれてくる妹が、「待ちきれない！」とばかりに子宮の壁を足でスライドさせ、合わせて母のお腹が大胆に変形したこと――。どれだけ年月が経過しても、その瞬間の映像は細部まで鮮明に思い出すことができる。あれは、あの時だけの特別な映像だった。

…：当然だけど、私も貴女のお腹の中にいたんだよね。

慌ただしく過ぎ去る日々をこなしている今、胎児の時の記憶なんてほんのひとかけらも残っていない。でも普段気に留めていなかった「子宮」という存在が、剥き出しの私の意識に迫ってきて、不思議な、そして感傷的な思いを抱いた。最初、人は皆、子宮の中で生きていたから。

胎児にとって、子宮はまさに家のようなもの。初めて住み込むその家は、唯一命を繋ぎ止めるパイプの臍

の緒を備え、外の強すぎる刺激から身を守り、生命の永い永い進化を再現する赤子を温かく包んでいた。そんなかつての家が、役目を終えて、とうとう母の体内から去ってゆく時がきた。

家出してからすでに二十四年。其処に帰宅する選択肢は、最初から存在しなかった。過去の時間において、どんなものより「私」という命を生かす、中心的役割を果たしていたもの。現在において、母の体調不良の一因である筋腫に侵されているもの。そして私も、この身体の中に新しい生命を育むための「子宮」を持つていること。

ついさっきまで頭をかすめもしなかった考えが、次から次へと溢れ出てきて、回収仕切れないほどだった。強いて言うなら、幼い頃常に持ち歩いていたお気に入りのぬいぐるみが、思春期にはもう要らないガラクタの一つになりその存在すら忘れていったのに、ある日抽斗の奥からふいに見つけて愛おしい気持ち溢れてくるような…：。そんな感覚だった。

開腹手術は我が家で初めての経験だった。「みんな多少は心配してくれたわ、多少ね（笑）」家族全員の反応や様子を事細かく送って満足したのか、この文面でLINEメッセージは終わった。

「手術は無事に終了しましたので、予定通り退院できると思います。」

十月十一日、手術日に合わせて帰省した私と父の目の前に、執刀医の先生が取り出したばかりの子宮を見せてくれた。

「どうぞ、触ってみてください。」

母の体内から摘出された子宮は、生々しいほどに鮮血を纏って容器に乗せられていた。本来の子宮の倍以上に膨らんでいる大きな筋腫は、筋肉のように硬く、まるでたんこぶのようだった。通常の子宮は握り拳程度の大きさだという。対して筋腫も含めた母の子宮は、赤子の頭ほども肥大化していた。

生命を育んでいた家。私達兄弟を両親の元へ送り出す手助けをしてくれた家。紅に染まるこの塊を見た瞬間、実家の門をくぐった時と同じ感覚が脳内を駆け巡った。

——ただいま。ありがとうございます。お世話になりました。

母は全身麻酔の影響で、まだ瞳を閉じている。起きたら貴女にも伝えなくては。大人になるにつれ、素直に言えなくなったこの言葉を。

一般の部 優秀賞・実行委員会賞

実印

石川県 坂井 和代

「お母さんと一緒にお話しがあります。」入学して一ヶ月で高校の担任の先生に呼ばれた。

高校生になったらやりたいと思っていたのがアルバイトをする事だった。バイト先は中学の部活の先輩が働いているドーナツシヨップ。オレンジ色のミニのワシンプイスの制服に紙のキャップ。地方の田舎町に住む私にとって眩しく都会的に見えた。コンビニの二十四時間営業があたり前の今と違ってドーナツシヨップの二十四時間営業も珍しかった。中学の卒業式を終え春休みに面接に行った。面接といっても制服のサイズといつから来られるかを聞かれるぐらいだった。初めてのアルバイトは同級生としか会話した事がなかった私にとって他校の高校生や年上の大学生。大人の店員といった年齢が様々な人との会話が刺激的だった。大学生活の話。深夜に集まる人達。接客のコツ。今まで知らなかった社会の扉を開けたような場所だった。休憩時間は好きなドーナツとドリンク飲んでもいいよと言われ、初めて砂糖なしコーヒーを飲んだ。バイトの先輩達が甘いドーナツには甘い飲み物よりも砂糖抜きのコーヒーの方が味が分かるよと教えてくれた。確かに

その方が味がよく分かる。バイトを始めて一ヶ月目で呼び出しをくらった。学校の休み時間に友達に話をしていたのを聞いたクラスメイトの告げ口からだった。今で言うチクリだ。「お母さん学校に来てくれる？バイトの事で呼び出された。」恐る恐る母に言った。

「なんかうちの子悪い事しました？」その日職員室で母は大声を出した。「水商売で酒を出すわけでもなく、ドーナツとコーヒーしか売ってない店のどこが悪い。入学したばかりでバイトの許可の方法が分からなかっただけや。今すぐ用紙持ってきて下さい。」激昂する母に担任の先生はあたまふたした。「親の判子があればいいんやろ。家で一番大きな実印持ってきた。」と母。その日認め印の代わりに力まかせに書類に押された大きな実印の朱色が目に焼きついた。成績が落ちたら辞める条件は付いたが母の剣幕に押されて学校から許可が降りた。思春期の頃はちよつとしたきつかけで人間不信になる。不登校になりそうだったが母が私を守ろうと盾になってくれたおかげで回避出来た。バイトは社会勉強になるし自分の力で賃金を得る事も嬉しかった。もう誰が告げ口したかはどうでもよく思えた。バイトも学校も休む事なく高校を卒業。推薦ももらい上の学校に進み栄養士の資格をとった。

「どれ実印かわかる？」弟が聞いてきたのは九年前母が亡くなった時だった。父が亡くなり元気に一人暮らしをしていた母の七十四才の突然死。予期せぬ死に

兄弟三人で途方にくれた。物を捨てられない時代に生きてきた母。家の中は物であふれ、どこに何があるか分からない。書類に必要な判子を探しているといくつも出てきた。どれ実印かわかる？と弟。高校一年から三十年間見た事がなかったがすぐに分かった。「この中で一番大きな判子が実印や。」と弟に手渡す。持ったとたんにあの日我が子を守ろうと家の一番大切な実印を持って必死になつてくれた母の顔が蘇る。アルバイトの許可書に押された実印のあかあかとした朱色が浮かんできた。葬儀の後の雑務に忙殺され硬くなった心がほぐれ涙が溢れて止まらなくなった。

あなたとの会話

福井県立大野高等学校 澤田 晴

「やっぱり濃いな。」私は祖父の作った味噌汁を片手に思う。決して言わない。私が見ていたクイズ番組を勝手に高校野球に変えてしまった祖父を睨むように見つめて、心の中に言葉をしまふ。

今年の八月初日。両親と妹が出かけたため、私と祖母の三人だけでその日を過ごすことになった。昼に起きた私は祖父の濃い味噌汁を飲み、リモコンを支配されたことに腹を立てながら階段を上り自分の部屋に向かった。その時、壁に飾られた一枚の写真が目に入ってきた。祖父に抱っこされるのを嫌がっている私の写真である。あまりにも私の記憶どおりの様子だったので、おかしくなっていて、もつとそんな写真を探してみたくなった。

さつそく棚からホコリだらけのアルバムを引きずり出して、ぼーっとページをめくっていく。さっきのこともあって、祖父と私はいつからあまり話さなくなっただのか気になった。祖父と私の写真は数枚しかなかったが、意外にも思い出はたくさん見つかった。祖父は私がいるのにお風呂の電気を消したり、酔っ払って私をからかって泣かせたりと、あまり感動的な思い出

はなかった。私も人のことを言えず、祖父がお酒を飲みすぎると母に怒られるのを知っていて祖父のいない間にゴミ箱にあった缶ビールを机に並べたり、花に水やりをしている祖父を狙って二階の窓から消しゴムを投げたりしていた。思い出の中でもおかしな祖父と孫だが、なんだか今より暖かいものを感じた。もつと私たちの間には賑やかな会話があった。祖父との会話がなくなつたのは誰のせいだろう。決して私は祖父を避けているわけではない。しかし昔とは何か違う。考えれば考えるほど自分に思い当たる節があつて自分の反抗期のようなものを感じて恥ずかしくなつた。そして、祖父の気持ちを考えて胸が苦しくなつていった。

「おーい、晴!!」と、私を呼ぶ祖父の声ではつと違った。下へ降りると、祖父に夕飯のお惣菜を買いに行こうと誘われた。いつものようにいらぬとは言えず、一緒に行くことにした。

土木の仕事をしている祖父の車は泥だらけで、シートには煙草の匂いが染み付いている。そのうえ、祖父はふわっとしたブレーキの踏み方なので私は最初から祖父の車では横になると決めていた。家を出た頃にはもう日が沈みそうだった。クーラーをつけているのに窓を開けたままの車は、淡い赤色の空の中を走る。窓から見える電線と立ち並ぶ屋根の雰囲気で私は疑問に思ってしまった。「なんでそんなに遠回りするの?まっつすぐ行こうよ。」と言うと、「じいちゃん信号嫌いな

の。」と、頭をかきながら少し強い口調で祖父は言った。私はもう一つ何か言おうとしたが、蟬時雨が私たちの会話に終止符を打った。

うまうまいかない祖父との会話にモヤモヤしながら夕食を食べた。私は濃いと分かっている味噌汁を茶碗いっぱいすすって、祖父に見せつけるかのようにそれを飲んだ。リモコンは誰の手にもなく、ただ静まりが食卓を襲った。

その後、庭のデッキに出た祖父について行って私も外に出た。煙草と焼酎の入ったグラスを片手に祖父は不思議そうな顔で私を見た。早くモヤモヤをかき消したいという思いからか、「じいちゃんてどうやってばあちゃんに告白したの？」といきなり聞いた。自分が言ったとは思えない一言だった。「そんなの覚えとらんわ。でもばあちゃんは勉強もできたし、べっぴんさんやったぞ。」と少し笑いながら祖父は言った。「ばあちゃんへのラブレターに『あなたに変えます。』って間違えて書いたんですよ。」と、私は昔母から聞いたことを使って攻撃した。すると祖父は大声で笑った。私はびっくりした。「そんなこともあったかもな。」と祖父はにっこり笑って言った。気づくと祖母も網戸越しでクスクス笑っていた。少し恥ずかしくなったが、モヤモヤは吹っ切れた。それから祖父の昔話をたくさん聞いた。祖父は昔からやんちゃだったらし

い。どの話もやっぱりおかしくて、気づいたら三人でずっと笑っていた。

少し静かになつて、祖父の焼酎の氷の音が心地よくなる中、私はただ一人ウキウキしていた。久しぶりに祖父の笑顔が見れた。会話なんて取り戻そうと頑張るものじゃないなと思った。そもそも家族の会話を「会話」なんて堅苦しいもののように扱っていたことから私は間違っていた。そんなことより、ちらちらと顔を出す祖父の優しさに感謝を伝えよう。「今日はお味噌汁ありがとう。少し濃かったけど。」

蚊取り線香のいい香りは、私が入ろうとするのを引き留める。ゆっくりと流れる雲から月が顔を出す。それは不恰好で決して満月ではないけれど、確かな優しい光で私たちを包んでいた。

高校生の部 優秀賞・げんでんふれあい福井財団賞

特別な自己紹介

福井県立高志高等学校 奥島 由樹子

「おばあちゃん、ひ孫の『ゆきこ』だよ。」
私の一日は、ひいおばあちゃんに対するこんな自己紹介から始まる。

折紙、お手玉、散歩……。ひいおばあちゃんは、幼い私とたくさん一緒に遊んでくれた。夏休みの宿題もよく見てくれたし、中学卒業までの七年間続けた書道も、きっかけはひいおばあちゃんが字をほめてくれたことだった。

小学校高学年の頃、ひいおばあちゃんが高熱を出して入院した。当時の私は反抗期真っ只中。母に行くように言われたお見舞には一度も行かず、いつもと同じ日々を過ごした。

ある日学校から帰宅すると、ひいおばあちゃんも退院したらしく、家に戻ってきていた。

「ただいま。」

お見舞に行かなかったこともあり、少し気まずさを感じながら言うと、

「はい、こんにちわ。」

と笑顔で挨拶を返された。驚いた。いつもなら、おかえりなさい、とか、今日は学校どうだったの、とか、

しつこいくらいに話しかけてくるのに。久しぶりに会うひ孫に他人行儀な一言で返すなんて。驚きと同時に、不満も感じてしまった。

次の日、帰宅して、ただいま、と言うと、

「お姉ちゃん、外は暑いですか？」

と言われた。一瞬固まった。お姉ちゃんって誰のことだろう。そんなことも考えたが、視線は私を向いている。

「私、『お姉ちゃん』じゃないもん！」

気付いたら、叫んでしまっていた。ひいおばあちゃんには困った顔をした後、悲しそうにしている。悲しいのは、泣きたいのはこっちの方だ。忘れてしまったんだ、私の名前を。私を。部屋に戻ってベッドに横になりながら思い出す。初めて筆で書いた「十」の字をほめてくれて嬉しかったこと。ひいおばあちゃんの誕生日に、私のケーキの苺を横取りしていたずらっぽく笑う顔。テストの点数が悪くて落ち込んでいたときに教えてくれた、前向きになれる言葉。全部全部、私はちゃんと覚えてるのに、なんで忘れてしまうなんてことと悲しみに涙があふれ出そうになった時、私は、いつかの母の言葉を思い出した。

「人間は、年をとると赤ちゃんに戻っていくんだよ。だからもし、おばあちゃんが何か大事なものを忘れたら、ゆきちゃんが優しく教えてあげなきゃだめよ。赤

ちゃんの話したくても話せないのと同じように、思い出したくても思い出せなくなるの。だから赤ちゃんと同じように、優しく、笑って教えてあげてね。」

分かっていて。認知症だって。忘れられたことを認めるのが怖くて逃げた。思い出したくても思い出せない方がよっぽど怖くて悲しくて泣きたいはずなのに。それなのに、あんな顔をさせてしまった。部屋を飛び出して、謝った。わんわん泣きじゃくる私にひいおばちゃんは、いいのよ、いいのよって笑って許してくれた。

私は考えた。名前を言っても忘れてしまうということは、毎日が初めましてなんだ。忘れたことは、私が教えてあげればいい。そうして思いついたのが、毎日自己紹介をしてあげることだった。

ひいおばあちゃんは今年、九十九歳を迎える。もちろん歩くことはできず、食事もお風呂もトイレも一人ではできない、すっかり赤ちゃんになってしまったけれど。

朝食を食べていると声がする。

「今何時だい？」

立ち上がって声のする方へ歩き、答える。分からないことは私が教えてあげるんだ。

「朝の七時だよ。」

それからね、ひいおばあちゃん。

「ひ孫の『ゆきこ』だよ。」

高校生の部 優秀賞・福井新聞社賞

いつかの匂い

福井県立武生商業高等学校 青山 千春

「これ書いてもらってもいい？」

そう言っ母は私に、書類をわたしてきた。ああ、またか、と思いつつ私は

「分かった。後で書く。」

冷たくそう言ってしまった。何で住所も書けないの。罪悪感があったが、それよりイライラが勝ってしまった。ひらがなもまともに書けない母が私は恥ずかしかった。

母は、十七歳の時にフィリピンから来日したそうだ。母の家は貧しくて当時バブルだった日本に出稼ぎにきたのだと母は言っていた。十七歳という若さで右も左も分からない国に家族のために、お金を貯めるために、働きに出た母。素直に尊敬できる。しかし、人生の半分以上を日本で過ごしてきて、何故日本語が読めないのか、書けないのか。電話の声も大きいし、怒るとフィリピンの言葉で話し始めるし。

「日本人のお母さんだったらいいのに。」
と何度も思った。

そして中学を卒業した春休みに私は母と一緒にフィリピンに行った。初めてではないけれど久々だったので緊張した。

飛行機から降りると日本とは違う匂いがした。そして、やはり出迎えをしてくれたいとこ達が、何を話しているのか分からなかった。それが余計に私を不安にさせた。

何日かしてから私達は遠くにいる親戚に会うため、バスに乗った。十四時間という長い時間バスにゆられていた。少し体が重い気がしたが疲れているからだろう、と思った。しかし、しばらくすると立っていることも辛くなってしまったので熱を計ると四十度近くあった。熱は全く下がらず三日くらいが経った。その間、母はずっと私のそばにいてくれた。

「久しぶりに家族に会えたのに看病させてばかりで申し訳ない。」

という思いが膨らんでいった。そしてそれと同時に、家族に会えない寂しさ・慣れない土地・人に対する緊張・不安などが一気に私の心を埋めつくした。

私は気づいたら泣いてしまっていた。母は

「どうしたの？ 気持ち悪いの？」
と、とても心配してくれた。私はとぎれとぎれになっ
てしまったが、母に思いの内をすべて打ち明けた。ご
めんね、と。

「そんなん気にせんくていいんやっ！ 大切な家族なんだから苦しんでたらそばにいるのはあたり前やろ？」

母は泣いている私に向かってそう言った。私はその一言でとても安心できた。なんてあたたかいのだろうと思った。

そんな出来事から、もう二年近く経った。母は相変わらず住所が書けない。だけどそんなことはどうでもいい。あの日以来そう思えるようになった。今の私と同じ年齢で日本にきて、家族と離れて暮らすということとはとても勇気もあるし、寂しいだろうと身を持って体感した。しかし、母のその勇気のおかげで私は今ここにいる。そして、私の大切な家族もいる。そう考えられるようになった私は、昔の自分が恥ずかしい。そしてやっぱり、自分の家の匂いが一番安心できるなと思った。

故郷は鍋の味

福井県立鯖江高等学校 石谷 拓海

私の将来の夢は、地元である福井県で地方創生に尽力することだ。しかし、私は昔から地元愛に溢れていたわけではない。その背景には、大きなきっかけとなる忘れられない鍋があるのだ。

ことの発端は先輩からの誘いだ。高校二年生の三学期、進路をまだ決めきれず悩んでいた私に、視野を広げるためにとある提案をしてくれた。それは、学生だけで町おこしを目的としたイベントを企画、運営してみないかという趣旨のものだった。先輩の話によると、学生のそういった活動を支持してくれる団体があるらしく、私は新鮮な体験ができそうだと思いつつ返事で誘いにのった。その時の私は、町おこしに全く興味はなく、「面白そうだから」と短絡的な感情で動いていた。県外の大学、それも都会での一人暮らしに憧れの念を抱いており、地元に残るつもりは無かったからだ。

イベントは友人と三人で計画することにした。先輩のついで例の団体を紹介してもらおうと、早速会議が開かれ、企画内容からポスター作成、市から貰えるお金の詳細な内訳などを連日に渡って決めていった。最終

的に決まった企画は、参加者に地元で採れた食材を持参してもらい、集めて鍋にして食べるというものだ。コスト面でも参加者の満足度でも期待できるイベントになるぞ、と晴れやかな気持ちで当日を迎えた。

イベントは家庭の晩ご飯と重なるように、午後七時から開催した。それまではセッティングや鍋の準備でんでこまいになっていた。時間ギリギリにようやく用意が完了すると、続々と地元の人がやってくる。ビニール袋いっぱい野菜を詰めて来た老夫婦、豚肉を連れて仕事仲間と来た、つなぎ姿の初老男性二人、「独りだから」と笑いながら私が初めて見る量の里芋を抱えて来た、白髪の独身男性：三者三様ではあるものの、私は年齢層の高さが気になった。

各々が持ち寄った食材を次々に鍋に加えていく。それに共鳴するように、地元の人も机に寄せ集まってくる。私は人見知りです話し下手なので、話より仕事に専念していた。

用意も済み、あとは煮込みが完了するのを待つだけだと考えていると、老夫婦のおじいさんに声をかけられた。

「お兄ちゃん、頑張ってるねえ。いくつなの。」

「今高三で、十八になります。」
聴き取りやすいようになるだけゆっくり大きな声で答えると、「そうか、そうか」と頷いて、語り始めた。

「うちんどこにもお兄ちゃんくらい孫がおつてなあ。都会がいいんやー田舎は嫌いじゃー言うて、名古屋まで行つてもうたんやお。」

私はそのとき、落とし穴に足を踏みこんだ事に気付いたような、ビクリとした感覚を覚えた。おじいさんの孫と自分の考えが一致したと同時に、ひどく哀しく笑っているおじいさんと目が合ってしまったからだ。愛想笑いもできずに、ただ視線を泳がせてしまつていた私に、おじいさんが続けて質問した。

「お兄ちゃんも、やっぱ福井出たいんか。」

私はその問いに即答出来なかつた。以前までなら即答していた筈なのに。代わりに私は、おじいさんに質問を返した。

「おじいさんは、福井の何が好きなんですか。」
私が絞りだした問いに、おじいさんは快活に笑つてみせた。

「福井の何が好きつて、そりや全部やろ。人も、自然も、食い物も。福井に生まれてんやし、嫌いなもんなんてねえつて。お兄ちゃん、福井の嫌いなところあるんけ。ワハハ。」

さも当然のように言つてみせるその言葉には、半世紀を地元で過ごしてきた重みと、論理的でもないのに何故だか妙に納得してしまう力があつた。私は途端に地に足がついたような気がして、
「僕も好き、です。福井。」

と答えていた。

「お兄ちゃんお鍋もういいよ。」

隣のおばあさんに促され、蓋を開けると、私の顔を覆うような湯気と熱気が顔を出した。福井の食材のみで完成されたその鍋の湯気と熱は、私にいつもと違う「温もり」を感じさせてくれた。同時に、今まで漠然と都会に憧れて、故郷も何も想つていなかった自分がとても恥ずかしく感じた。

出来上がった鍋を、全員分よそつていく。受け取る地元の人らは「ありがとう」の言葉を誰一人欠かさず言つてくれる。今まで意識していなかつた些細なことでも、ふと振り返ると愛を感じる。そんな愛を感じていると、私にも故郷への愛が芽生えてくる。そう考えではないかと思えてきた。幸せを内包したその姿が、そう見えて仕方がなかつた。

私が言うのは、感謝の言葉。
「いただきます。」

高校生の部 優秀賞・実行委員会賞

カエルと気付き。

福井県 仁愛女子高等学校 奥村 咲耶

暑さからくる気怠さに抗うようにペダルを踏み締め、私は、奇妙な同乗者がいたのを思い出し、あわててスピードを緩めた。私がじっと見下ろすと、視線から逃げるように、その同乗者はタイヤの泥避けの上に移動した。

九月の半ば頃。その日も最高気温は三十度を越える。と報じられていて、自転車通学の私はその日も「学校に行きたくない」と嘆いていた。いつも通り母に家を追い出された私はいつも通り暑さに呻き声を上げて、いつも通り自転車に跨がった。でも、カエルが同乗しているのは全くもっていつも通りではなかった。

一般的に、女子高生という生き物は節足動物、爬虫類、両性類といったものは好まない。例に漏れず私もそういう類の生き物とお近付きになりたくない。だから、同乗者であるカエルくんを手で払い落とす、なんてことはできなかった。しかし段差に乗り上げた際の振動で彼が私のスカートや足に着地する、というのにも御免被りたい。だから私は、カエルが好きそうな場所になると、スピードを落として自転車を漕いだ。このあたりの庭は毎日水やりがされていて過ごしやすそ

う。このあたりは日当たりが悪くてじめじめしている。ここは工事中だから少しあぶないかも。この家はたくさんの花のプランターがあつて華やかだなあ。この空き地は背の高い草が多く茂っているからいろいろな生き物がいそう、といったふうだ。

結論から言うと、そうした私の努力は全くもって意味がなかった。カエルくんは途中から微動だにすらしなくなっていた。そして学校について私が自転車から降りた途端、彼はアスファルトの地面の上に飛び降りたのだ。私は「どこでもいいなら赤信号で停まったときに降りればよかったのに。」と呆れながら思ったのを覚えてる。

帰り道、もちろんカエルくんはいなかったが、私は気付いたことがあった。これまで毎日同じ道を通っていたにも関わらず、私は周りの風景をよく見ていなかったのだ。朝、綺麗だと思った花は日中の暑さでおれてしまっていた。雲ゆきが怪しくなったことにより、朝は感じなかった湿り気を帯びた風や、雨の独特な臭いがした。雨粒が落ちて水玉模様のできたアスファルト。他にも様々なものが、朝とは変化していた。一つ一つ、違うところを見つけたいくたび、私は毎日、何を考えながらこの道を通っていたんだろう、とぼんやりと考えた。

その日から毎日、私は昨日と、今朝と違うところを探しながら同じ道を通っている。木々の葉が少しずつ

色付いてきた。どこかから金木犀の香りが漂ってくる。今日はカラスが多いなあ。そんなことを思いながら。この習慣が身に付いたのは、あのカエルくんのおかげだ。次にカエルが自転車に乗っていたら、私はもつといい場所を紹介できる。

高校生の部 優秀賞・実行委員会賞

ダブルストック

大分県立竹田高等学校 高橋 健太

三年前から難病指定の病気を患った父は、かつては毎週のように行っていた登山をやめた。高校の英語教師としてのキャリアと、高校山岳部顧問としてのキャリアは重なるというから、三十年続けてきた登山をやめたことになる。父は現在、家から車で一時間かかる高校で英語教師をしている。その高校に、山岳部はない。昨年まで二年間、父と僕は山岳部の監督と部員の関係だった。何度も全国大会に導いただけあって、監督としての父から山について教わることは多かった。昨年、三重県の鈴鹿山系で行われたインターハイでは親子で出場できた喜びを父は隠さなかった。父が山に登らなくなったのは、もちろん病気によるものだが、車には山の道具が積まれたままだ。六十リ

ットルのザックにはテント、寝袋、炊事用具、着替え一式、水筒などがパッキングされている。泥を落とし、た登山靴が袋に収まっている。ウエストポーチにはヘッドランプ、予備電池、救急用具と医薬品が入っている。今すぐにも山に登れる準備が整っているのだ。ただ一つだけ、見慣れないものがあつた。新品の登山用ストックのセットだ。父は登山をする際に決してストックを使わなかった。読図用の地図を見る際や、写真を撮るときにじゃまになるからと言っていた。

「それに、ストックなんか使わなくても正しい登り方、降り方をすれば膝を痛めたりはしないものだ。」確かにそう言っていたはずだったが……

父が転勤した春、僕は三年生となり、八月には地元祖母山で行われたインターハイに出場した。大会二日目、親父山を目指して仲間と急登を進んでいるときに父の声がした。

「がんばれ、竹田高校。がんばれ、健太。」そこには登山姿の父がいた。目で声援に応え、通過した。父の両手にはストックが握られていた。かつての教え子の僕らを応援するために最短ルートを調べ、先回りしていたらしい。なんだか熱いものがこみ上げてきたが、規定時間をクリアすることを考えていた僕は、その日の行程が終わった夜のテントで次のように語り合ったのだ。

「なあ、確かにあの一番しんどい登りで高橋先生がおったよな。」

忽然と現れ、忽然と消えた父は、その後も一人で登山を再開した。僕はインターハイを終え、部活動を引退し、受験生となった。これまでに登ったどんな高い山よりも高い山に挑戦するために。おそらく、志望校合格という山は、上高地から岳澤コースで登った奥穂高岳よりもしんどいに違いない。くじゆう山系の鉾立峠から白口岳を直登するよりもきついに違いない。

「やれやれ」と思いながら、僕はまだいつこうに姿を現さない頂に向かって麓を出発した。父は転勤先で三年生の担当になったらしく、時折、自分が教える三年生の様子を伝えてくる。そのたびに、「負けてられるか！」と思う。これもまた父の術中にまんまとはまったことになるのだろうなと思いつながら。

父は、週末の二日間を休養にあてていた。一日二十四時間のうち、二時間を車での移動にとられるのはもつたいないと言うが、実はその二時間が父を疲弊させていることも僕は分かっていた。金曜日の夜から土曜日までを体と心を休めることに費やしていた父が、日曜日に山に登り始めた。日帰り登山が可能な近郊の山ばかりだったが、それらの山は父が幼い頃から登ってきたくじゆうや祖母傾山系、そして阿蘇の山々だった。名前を挙げたすべての山が我が家から見える。改

めて、登山をせずにはいられないような環境で生まれ育ったことを知る。

「いやあ、時間がかかって仕方がないわ。以前と比べたら、まったく登れん。」
そういいながらも夕方に笑顔で父が戻ってくる。泥の付いた登山靴とストックの手入れをしながら僕に言う。

「どうだ？〇〇大学の山頂は見えてきたか？」
僕は模試の判定を父に差し出す。父はストックを脇に置き、両手で模試の個別成績表を見始める。その顔は教師の顔だ。

「失点した箇所の手当をせんとな。お前が苦手で避けてるところが、実は一番伸びるところやけんな。」
きつと、同じような台詞を勤務校の三年生にも言っているんだらう。模試成績を僕に返しながら言う。
「まあ、がんばれや。お前ならできる。」

僕は受取りながら言う。
「うん。」

父さん、僕が合格したら一緒に山に行こう。父さんがいつか話してくれた高島トレイルに行こう。休みながら、あれこれ話しながら、ゆっくり、ゆっくりダブルストックで歩くんだ。琵琶湖と若狭湾が両方見える分水嶺に達したら、僕がコーヒをいれるよ。そんなことを考えながら、今日も僕は過去問と向き合う。春はまだか。

川沿いの景色

福井県立藤島高等学校 三隅 咲希

中学校のすぐ隣に、そこそこ流れのはやい川があった。建物の隙間にすらりと流れるその川と、そこでのぞけるほんのちよつとの自然が好きで、当時の私は、わざわざ少し遠回りして、川沿いの道で通学していた。

夏の初めのころ、確か二年生のときだったと思う。川を眺めていた私の目に、一匹の鳥のひなが映った。水面に危なっかしく浮いて、じたばたと水を掻いている。明らかに水鳥ではなく、そばに親鳥の姿も見当たらない。そこへふわりと、どこからともなく、カラスが飛んできた。ぴい、ぴいという精一杯の抵抗もむなしく、ひなはあっさりと連れ去られた。川の向こう岸に飛んで行ったカラスが、ひなをちぎって、飲み込むのが見えた。

あつという間のことだった。私は、なにも行動を起こすことなく、ぼかんと見ていることしかできなかつた。カラスに威嚇していた小さなひなは、今でも目に焼き付いている。あのひなは、どんな鳥に成長するはずだったのか、今となっては確かめようがない。私は鳥にくわしくないが、もしあのひなが大人に

なったら、どれだけ美しい姿になったのかと考えると、カラスのことが少し憎かった。

それから少し経った、夏の終わりごろ。川沿いに立っている木の周りで、一羽のカラスが飛び回っていた。カラスは、木に近づいたり離れたりしながら、木の中の様子を気にしているようだ。目を凝らして見ると、もう一羽、木の奥にカラスがいることがわかった。ほとんど大人と変わらないくらいにまで成長したひなを、親鳥が飛びたせようとしているようだった。

ひなはなかなか羽ばたこうとしない。親鳥は、木の近くの塀にとまって、見守ることに徹しはじめた。私もそろそろ帰ろうか、と思ったとき、ひなが羽を広げるのが見えた。意を決したように、一気に巣を飛び出す。精一杯に風を受け、川を横切ってこちら側まで滑空してきた。ひなは、目の前の柵に着地しようとして失敗し、柵に激突して川端の地面に落下した。私のすぐそばだった。

このひなはまだ、人間を見たことがないのか、好奇心に満ちた大きな目で、私を見つめてきた。私がかがんで、ひなと視線を合わせる。ほとんど大人の羽に生え変わっているが、首や頭のあたりには、まだうっすらと産毛が残っていた。満足に飛んで逃げることもしないのに、慌てる様子も怖がる様子もなく、くもりもない目で見つめてくる、真っ黒なひな。そのとき、

私はふと夏のはじめ、カラスにさらわれた小さなひなのことを思い出した。

まだ産毛が生えたばかりの、灰色のひな。あのひなをさらったカラスにも、もしかすると、幼い子供がいたのだろうか。今目の前で私を見つめているこの子のように、かわいらしいわが子のために、弱ったひなの命を奪ったのだろうか。私はこのとき、自然の厳しさと同時に、美しさも知った気がした。

鳥たちは、みんな必死に生きています。だからといって、決して自分勝手にふるまっているわけではない。動物たち、植物たち、それら全てが絶妙なバランスを保って、一つの環境を作り出しているのだ。理科の教科書に書いてあった、面白味もない文章が、初めて実感としてわいてきた。

カラスの巣立ちを見てからも、あの川沿いでは、たくさんの自然を見ることができた。鴨の親子が列をなしていたり、鷺が小魚をねらっていたり、ほほえましいことも、きびしい現実も、ほんの少しだけけれど、見ることができた。私は中学を卒業し、川沿いの道を通ることも減ってしまったけれど、三年の間で、私が見た美しい光景は、一生忘れることはないだろう。

あの時見殺しにした鳥のひなさん、あなたの命は、決して無駄にはなっていない。大きな流れのなかで、きつと生き続けるでしょう。またどこかで、めぐ

り合うことがあるかもしれません。そのときは、あのあと起こったいろいろなことを、私が話して差し上げます。不快な点多いかもしれませんが、ぜひお聞きになってください。あなたが生きた一瞬の世界は、あなたのおかげで、こんなにも輝いています。

高校生の部 佳作

香る真実

福井県

ハナ

花言葉は「真実」。金木犀は秋になると花を咲かせ、芳香剤のように甘い香りを放つ。私はこの匂いが大好きだ。だが、私は最初この花言葉を知った時、なぜ「真実」なのかが分からなかった。

私の小中高の通学ルートには金木犀の木がある。十月頃に自転車で横切ると風が金木犀の匂いを運んでくる。この匂いが漂う道を約十二年間通い続けた。

私は中学生で吹奏楽部の部長を務めていた。みんなをまとめられず顧問に怒られ、うまくいかない日が続いた。日も続いた。その時に金木犀のある道を通ったら、誰も納得してくれないと思っていた心が、金木犀の甘くあたたかい香りで包まれた気がした。そして、目にた

まっていた涙があふれだした。「大丈夫、大丈夫」と言う声も聞こえてくるような気がした。顔を上げて金木犀のオレンジの花を見たとき、太陽のようにあたたかく優しいもののなかに力強い何かを感じた。それを見ると自分も頑張らなければという思いになって、これまで以上に全力で部活動に取り組めた。こうしよう、ああしようと自分なりの思いをもって取り組んでいるうちにみんなもついてきてくれるようになり、顧問にもよく褒められるようになった。

高校三年生になって友達関係がうまくいかず不登校になってしまった。十七年間生きてきて、一番つらいことだった。みんなに無視される夢や、単位が取れず留年してしまい、決まっている大学にいけないとこの香りをかぐこともなかった。だけどこの前、車でその道を通った時に、久しぶりにあの金木犀の香りを風が運んできてくれた。その時、いつもと同じようにあたたかく休まる気持ちにさせてくれるのと同じように、何かに気付かせてくれるような感覚を味わった。そして、やつと花言葉の意味に気付けたような気がした。学校に行けない自分を責めたり、否定したりしていた私に「大丈夫、間違っていない」という声を風に乗せて運んできてくれたように感じたのだ。

それからというもののクラスには戻れないが、毎日学校には通うことができるようになった。「クラス

に戻ってほしい」と先生にも親にも言われたが、いまだ戻れていない。ただそれが駄目だとは思わなくなつた。学校に通えているだけで充分だと自分を褒められるようになった。それが金木犀の教えてくれた「真実」の結果だと思っている。クラスのみんなが無視をすることは何があっても駄目だ、ということや、それでクラスに戻れていない自分を責めるべきではないということ。学校に通うだけで誰かは頑張りを認めてくれて、助けてくれるということ。それを風に乗せて運んできてくれた。

金木犀とは十二年間ずっと一緒に生活してきた。まるで家族のような存在だ。私は地元を離れて他県の大に行くことが決まっている。もうしばらく会えなくなるだろう。これからの人生、壁にぶち当たって悩んだり迷ったりすることは何度もあると思う。でも私はもう大丈夫だ。これまでの人生で何度も金木犀に真実を教えてもらえたから、何が正解なのかはしっかり分かる。それでも壊せない壁が立ちはだかつたら、その時は帰ってきて、この匂いをかぎにすればいいのだ。きっとまたいつものように風に乗せて「真実」を伝えてくれる。

青天井を仰ぐ

愛知県 中京大学附属中京高等学校

四月一日

富士の登山は今年の夏で三回目だった。

過去二回、雷雨であったり台風であったり、ピンポイントの悪天候に見舞われた。登頂できたのは、今年が初めてだった。

一年目は雨の中の登山となってしまうが、あらかじめそれなりの装備を持ってきていたためにあまり苦ではなかった。もっとも過酷を極めたのは去年のことだった。

当時、一度東に流れた台風が西に戻ってくるという台風某号が直撃した日に、私は下山していた。

標高三千四百メートル前後。台風の中にいるために、実際にいるよりも高度にいる感覚だった。酸素が取り込めている気がしない。事実、手足の痺れが終始あった。風が正面から私を叩いた。視界も不明瞭だ。時折砂礫がこつこつと落ちてきた。

何よりも、手足が凍るように冷たかった。低体温症、低気圧による高山病、加えて重度の疲労。生れて初めて死という領域に片脚を入れかけてい

たように感じる。実際、必死の思いで帰宅した後確認したニュースによれば、私がいた数十メートル高所では死者が出ていたようだ。そのような散々たる経験をしておいて、私は懲りずに今年も挑戦したのだ。

三度目の正直——というよりも、半分以上はただの意地であった。負けず嫌いに身を任せて、私は富士に挑んだのだ。五合目の駐車場に着いた時点で、それまでとは違う、青い空が遠くまで広がっていた。

——君はどうして登ろうと？

同じツアーの参加者が、私にそう訊いてきた。

——頂から空を掴んでみたくて。

——空を？

私は黙ってうなずいた。それから数時間かけて高所に身体を慣らしてから、私は踏み出した。

それから五、六時間黙々と歩いてきた。水分補給と休憩をはさみながら、時折頂上の方を仰ぐ。一抹の後悔と、それを上回るほどの大きな希望を抱いていた。

本八合目、標高三千四百メートル。

山小屋に着く頃には、五体は鉛のように重くなっていた。遮るものもなかったため、星がよく見えたのを覚えている。四時間弱の睡眠と塩気の強い食事を摂り、私は柵にもたれながら珈琲を飲んでいった。風は穏やかだった。冷たい風が肺を満たしている。いつものような、暴力的な冷感ではなかった。

——もう少しだ。お前は今日、報われる。

そう呟いて、カップの残りを飲み干して私は早々と支度を始めた。

午前三時、標高三千七百メートル。

鳥居が見えた。山頂の入り口だ。

振り返って下界を見下ろした。点々と灯りが見える。都心に近い方ほどそれは密集していた。それを見ている内に、涙があふれてきていた。

——報われたな、三年越しに。

私は目元を拭って、マフラーの代わりに首に巻いていたタオルで顔を覆い直し、私は鳥居をくぐった。

空を仰ぐ。月と星はよく見えたが、空というものはよく見えなかった。しかし、確実に近づいているというのにはよくわかった。手を伸ばす。届かない。

——伸ばした手が空に届いたならば、それが私の目指した場所なのだ。

雲を見下ろしてもまだ遠い。これでいいのだ。頂上の神社に祈祷をして、誰よりも先に東の入り口に腰を下ろした。先達が隣に座って、山小屋で買ったであろうココアを渡してくる。

——これは？

——頂上の味ってところかな。

促されるままに一口飲んで、また私は泣きそうになっていた。いい加減に酸欠になりかけていたため、奥

歯を嚙んで押し殺しそうとしたが、止められなかった。

やがて東の空は段々と赤みが射し始め、太陽が地平線から姿を現した。

——眩しいな。

普段の太陽よりも眩しく、赤みを帯びていた。私はそれに手を伸ばして、そこではたと思い出して携帯を取り出した。右手を太陽に伸ばし、左手でシャツタを切った。

ずっと虚空ばかりを掴んでいた手が、ようやく何かを掴めたような気がした。

高校生の部 佳作

それも個性

京都府 立命館宇治高等学校 灰方 美晴

「実は俺、本当は女性として生きたいんだ。」

ある日、男性だと思っていた友人に、そう告げられた私は、言葉を失った。困惑。動揺。混乱。そんな感情が一気に押し寄せ、私の思考を停止させた。身体と心の性別が異なる。それはつまり、友人がLGBTであるということを意味していた。

家に帰った後、私は何かに取り憑かれたかのように、ただひたすらにLGBTについてのネット記事を隅から隅まで読んでいった。そうして、性的少数者とも呼ばれるLGBTの人々の中には、自分の性別に違和感を持ちながらも、それを誰にも打ち明けられないまま、一人で悩みを抱えている人も多数いることを知った。それまでに、テレビでLGBTについての報道を目にしたことは何度かあった。それもあって、自分はLGBTについての知識がある方だと思っていた。しかし、調べれば調べるほど、自分の知識不足を強く痛感した。

特に衝撃を受けたのは、LGBTの人口割合だ。性的「少数者」という名前から、身近には基本的にいないような、珍しい存在だと勝手に考えていた。しかし、電通ダイバーシティ・ラボによって行われた調査によると、なんと日本の人口の七・六パーセントがLGBTであるというのだ。この割合を、身近な学校の教室に置き換えて自分なりに考えてみた。まず一般的に、一つの教室には四十人ほどのクラスメイトがいる。そこに七・六パーセントがLGBTという調査結果を当てはめると、一つのクラスに、なんと三人もLGBTの生徒がいることになるのだ。もちろん、この割合がどんな集団にも当てはまると言い切ることはできない。年齢や地域によって差があるだろう。しかし、人口の約十三人に一人はLGBTである

という調査結果から考えると、今までの人生で関わってきた人たち、あるいは今も周りにいる人たちの中にLGBTの人がいたとしても、何も珍しいことではないのだ。

そう考えていると、過去実際にあった教室でのある出来事がふと頭をよぎった。それは授業中、ふざけた生徒が、少し女性らしいしぐさをした男性の生徒に対して、

「お前、おかまなんじゃないの？」

とからかい、クラスが笑いに包まれるという、子どもならよく起こりそうな光景である。当時の自分はその発言に対して特に何も思わなかった。むしろつられて笑っていることの方が多かったように思う。だが、身近にいる人がLGBTである可能性は決して低くないということを知った今、私の考え方は変わった。あのとき、おかまだとからかわれた彼は、どのような心境だったのだろうか。実際、彼がLGBTだったのかどうかはわからない。しかし、もしLGBTだったのなら。女性になりたくてもなれない悩みを、誰にも言い出せず、一人で抱え込んでいたのだとしたら。そう考えると、当時の私のなにげない行為は、彼にとって憎悪に値する、自己中心的で最低なものだった。仮に彼がLGBTでなかったとしても、クラスメイトの中には隠しているが、実はLGBTという人がいる可能性も十分あったはずである。その人は、クラスの友人た

ちの笑いをどのような気持ちで受け止めたのか。考えるだけで、胸が痛い。

世界には、数えられないほど多くの人々が存在する。また、一人ひとりがそれぞれ全く異なる性格、個性を持っている。冷静に考えてみれば、そんな中で人々を男性と女性の二つにばっきりと分けることなど、そもそも不可能なのだ。今まで述べてきたように、もはやLGBTの存在が珍しくないのだが、社会はLGBTの人々も生きやすいように対応できているのだろうか。LGBTである友人の答えはNOだ。男性に生れてきた時点で、社会はスカートを履くことを許さない。今では男性ものの化粧品も売られるようになったが、それでも流行りの赤リップを塗った途端、たちまち周りに距離を置かれる。テレビでは、自分と同じ環境のオネエタレントが笑いの的になっている。笑っている人々は、別にLGBTを馬鹿にして笑っているのではないのだとしても、友人はLGBTの自分まで嘲笑われているような感覚になるそうだ。また、実力テストやアンケートなどでは、性別を記入する欄がよくある。自分の希望と違う性別を記入する。その行為は、言わずもがな苦痛である。この現状を考えると、今の社会がLGBTの人々にとって生きにくいのは明白だ。

LGBTだと打ち明けてくれた友人は、カミングアウトする直前までやっぱりやめておくべきかと繰り返し返

し葛藤すると話していた。今周りにいる誰かは、実は誰にもLGBTだと言いつけずに出せずに一人で悩みを抱え込んでいたのかもしれない。今後、LGBTも個性の一つとして認められる社会に、誰もが自分らしく生きられる社会に、変わってほしい。いや、私を変えていく。そう決意した。